

【宇都宮大学教育学部英語専修の学生の感想】

■ 文教大学との合同ゼミで多方面に渡り、学ばせて頂きましたが、合同ゼミを通してより強く感じたことを3つ述べたいと思います。

1つ目は「提案力」。授業を見たり、話し合ったりする中で課題点を見つけることはたいていの人ができます。しかし、「じゃああなたはどうするの？」という問いかけに対して、見た授業・受けた講義・本などから得た根拠をもとに自分だったらこうするという提案が文教大学の学生は即座にできることを肌で感じました。ゼミの中で何度も話に出ましたが、やはり現場で多く学んでいることや、模擬授業への取り組みがゼミの中で充実していることなどが裏付けとなっているのでは、と考えられました。

2つ目は「継承的であること」。大学を出てからも、現職教員かつゼミの先輩としてお越しになった方がいたこと。異学年間でも交流が密であり、聞いたり教えたりしやすい雰囲気整っていること。そして、何より上学年が身をもって模範となる授業・発言等で下の学年に示せること。これらが相まって、大切にすべきことが引き継がれていくことが集団として成長する支えとなっていると感じました。

3つ目は「笑えること」。模擬授業をしてくださった2名の授業内はもちろん、話し合いの場面や進行、休み時間等で常に誰かが笑っていました。私は漫才・コントが大好きで、何度も見て言葉選びや、タイミング、声のトーンなどなぜ笑ってしまったのかをよく考えて見ます。その過程は授業作りにほとんど重なることがあると考えています。

さて、以上のような点を踏まえて、これから私たち宇都宮大学生はどのように学びに向き合っていくことができるのでしょうか。田村先生が宇都宮大学に着任されて以来、私たちは「外に出る」こと、つまり大学内以外に赴いて新しい学びを得ることをベースとして動いてきました。これまでのような機会がなければ、大学では講義と1～2回の教育実習のみを経て英語教師として1年目を迎えることになっていました。私を含む4年生は外に出る姿勢を保ち、得た経験を来年度からの教員生活に生かすこと。そして、後輩にその熱意や財産を言葉や態度で示していくことができます。2～3年生はあと数年学生生活が残っているので、今度は自分たちが先導する形で外に出ていくことができます。文教大学の学生のように、たくさん現場で学び、共同的に学び合える体系にはまだまだ確立していない初期的な段階ですが、私たちのこの試行錯誤の1年は何よりも濃い収穫のあった1年だったと自負しております。

記せば尽きませんが、私を含めた宇都宮大学の学生は多くの学びを得ることができました。私はもう卒業ですが、後輩たちが必ず繋いで、今後とも英語教育を通して良い関係を継続させて頂ければ幸いです。本当にありがとうございました。

4年 湯田 匠

■ 今回初めて文教大学との合同ゼミをやらせて頂くことで、今までの自分の実践や学びを振り返る良い機会になった。また、新たに学んだこともたくさんあった。

文教大学の学生による模擬授業では、教科書を扱いながらも、生徒の関心を引き付けるような工夫をされていた。教科書の一文を扱うにしても、発問を工夫して理解度を確かめたり、思考を促したり、生徒自身と教科書の内容を結びつけたりと様々な工夫ができるということが分かった。自分自身、教育実習の中で、読み物教材の扱いが大きな課題になったと感じている。どんな発問をするか、常に心がけてはいたが、今回学んだように、様々な発問を取り入れることで、これまで以上に生徒の思考を促すことができると感じた。単に訳読で終わることなく、題材を生徒の実生活や身近なことと結びつけることで、教科書の内容理解に留まらず、英語を使ってのやり取りにつなげていくことも可能になると感じた。そのことが、生徒自身の英語使用を増やすことにつながると思う。また、コミュニケーション活動において、英語に触れたり、使ったりする機会をいかに増やすか、ということを学ばせていただいた。

発問の工夫以外の細かな点でも、教材の使い方やピクチャーカードの扱い方など実践的な面からも大変参考になった。

私は、宇都宮大学からの学生の代表として、模擬授業においてALTの立場として活動した。教員になってから体験することの少ないALTの立場を少しでも体感できたように感じる。ALTだからこそ見える視点や支援、その心境を考えることができた。事後に文教大学の皆さんや阿野先生からアドバイスを頂いたことで、改善のための具体を考えることができた。この経験は、必ず今後生きていくと思う。

模擬授業を終えて、合同ゼミの最後に行ったディスカッションでは、文教大学の皆さんと話していく中で、文法の使用場面をどのように提示をしていくかということが大変印象に残った。使用場面は生徒の生活に合わせてその場面を設定しようと考えがちであるが、様々な出版社の教科書を比較することでその場面を考えていくことが有効であるということ学んだ。ディスカッションの中で話題に上ったことであるが、文教大学の学生の卒業論文テーマに関して話を聞かせて頂くことで、自分が大学内で学んでいることとはまた違った視点から課題を捉えることができた。大学内での決まったゼミでは自分のテーマについて深く学ぶとともに研究を進めることができるが、他のゼミの学生の方々と話をすることでさらに広い視野から課題設定をすることが可能になった。同じ英語教育を専攻としていても、また違ったポイントからのアドバイスや課題の提示があることで私自身の幅が広がった。

4年 五味田 紗莉菜

■今回文教大学阿野ゼミとの合同ゼミを行ってみて最初に驚いたのは、阿野ゼミの皆さんの学びに対する積極性だ。私たち宇都宮大学の学生を温かく迎えてくださり積極的に関わろうとしてくださる姿や、模擬授業中に積極的に発言したり意見交換の際に積極的に質問したり意見を求めたりする姿には、自分たちにはないものを感じた。大人数の前で堂々と授業を行っていた4年生を筆頭に、授業に関する様々な知識を持ち、あらゆる視

点から授業を見て、より良い授業を作るために真剣になっている姿が全体的に見られ、このような姿が2・3年生にも広がっているのは、先輩が後輩に学ぶ姿勢の手本を示し、後輩が先生だけでなく先輩と深く関わり合い、授業のアドバイスをもらう等が伝統的に行われている賜物であると感じた。

3つの模擬授業を通して、当たり前のことだが、改めて授業者が違えば様々な色の授業ができるということを感じた。最初の模擬授業では、教科書に出て来るボストンでは生徒にとって身近ではないということで、生徒にとって身近な神奈川で行きたいところ、そこで何ができるかといったテーマで **can** を使って会話させるというのが参考になったが、阿野先生からは次のような指摘があった。「場面の切り替え：ボストン→神奈川→ボストン→神奈川」という流れは不自然ではないか。」このことには強く納得させられた。私個人としては **can** を使った文章よりも、**want to** を使った文章に目が行きがちなテーマになってしまっているかもしれないと感じたため、ターゲットとなるもの（今回は **can**）を使う場面設定について考えさせられた。2番目の授業は、私も少し授業立案に携わったが、実際に授業をやってみないとわからないことがたくさんあると改めて気付かされた。ALT とのインタラクションで生徒に会話のモデルを示しつつも、生徒を巻き込んだ授業を行うにはどうしたらよいのか考えさせられた。阿野先生がご指導された、「**have to** と **should** と **must** と **can** の使い分けについてよく吟味する必要がある。」ということについては全く意識できていなかったのが驚いたし、自分の視野の狭さにも反省した。最後の授業は、自分の中ではつつこみどころのない素晴らしい授業だったと感じたが、田村先生がご指摘なされた、「メインとなる活動のことを考えた時間配分を検討する必要がある。」という点では、難しいことだが、まさにその通りだと思った。その授業の中で生徒につけさせたい能力は何か、そのために1番取り組ませなければならぬことは何か、自分の中の核は見失ってはいけないと改めて学んだ。

模擬授業の後のディスカッションでは、阿野ゼミの皆さんの豊富な知識に圧倒された。文法導入、発問、インタラクションの3つがテーマとなっていたが、私は主に発問について深く考えずに模擬授業や教育実習での授業をしていたので、反省した。発問のことだけではなく、阿野ゼミの皆さんの学びと自分の4年間の学びを比較し、春から教壇に立つ身として不安が増したが、同時にこの機会がとても良い刺激となり、教員になる前に、そして教員になってからも学び続ける姿勢を持ち続けたいと心から思った。そしてこの貴重な機会がこれからも続いていくことと、後輩たちの良い刺激になってほしい。

4年 吉田 成美

■先日の文教大学との合同ゼミ、本当に自分にとって刺激的で、一種のカルチャーショックのようなものを受けた。文教大学の学生の授業に対する姿勢、考え方、それらに裏打ちされた授業を、細部まで専門的に深く考察し、批判的に評価していく姿に、感嘆させられるばかりだった。これまで、私は英語分野に属していて、その教育課程の一通り

の科目を履修し、教育実習も終え、様々な授業も参観させて頂き、少しは一人前の教育学部生としていられていると思っていた。

しかし、文教大学の学生の模擬授業や、彼らとのディスカッション・休み時間の会話などを通して、授業を考え組み立てる上で、自分が教科書分析や発話語彙・スピードなどにおいて、いかに浅かったのかを痛感した。教科書分析では、各校種ごとの学年の繋がり、また各校種の繋がりを意識していたり、発問一つをとっても、ディスプレイ・クエスチョン、インファレンシャル・クエスチョンなど、その分類や働き、意義について理解していたりしていた。

「実習をまだ経験していないのに、なぜここまで、授業を細かく考察することが出来るのだろうか？」

そう思い、その理由を尋ねてみると、模擬授業を合計8回ほど行ったり、土日も授業観察に多く足を運びその考察をしっかりと行っていたりしているとのことだった。模擬授業では、先輩や教授が遠慮なく、意見を述べ、毎度模擬授業が怖いとも言っていた。しかし、先輩たちの多くの経験や学びから得られた授業や的確なコメントから、後輩が先輩を尊敬し、素直に受け入れ、次の模擬授業に活かすというサイクルができていたとのことだった。その話を聴いて、自分たちは圧倒的に実践不足だと感じた。ただ授業で学んでも意味がない。例えば発問について授業で学んだら、発問を最重要課題として、誰かが模擬授業を作ってみるなどして、ただの学術的インプットとして終わらせないことが大切だと感じた。これは言語学習にも通ずることでもあるので、とても大切な考え方だと改めて思った。

今回の合同ゼミを通して、自分にとっては特に、前後通して苦悩することが多かった。しかし、何よりも収穫だったことは、学外に出て、同年代の学生と出会い刺激を受け、視野が広がったことだ。教員ではなく他の進路をたどる自分にとっても、自分の専門分野を深化させることは、これから社会人になるにあたって、間違いなく強みになることは間違いない。今回、自分が最も話をする事が出来た同学年の女子学生も、教員志望ではなかったが、授業に対して、自分とは比べものにならないくらい、真摯に向かっている姿が印象的だった。そんな彼女を見て、自分も教員にならない選択をするにしても、特に在学中は、英語教育をはじめとする教育に関する幅広い知識や実践力を身につけるために精進していきたいと心から思うことが出来た。また、阿野先生という英語教育界の最前線で活躍されている方とお話しすることが出来たことも非常に貴重な経験だった。何かについて極めるときに、その道を牽引している方に出会うことで、自分たちに見えてこなかった高みが見え、最大の動機づけになると感じる。

以上のようなことを今回の合同ゼミで感じる事が出来ました。田村先生、改めて、貴重な機会をいただき本当にありがとうございました。

3年 菊池 巧

■合同ゼミを通して、授業方法、授業の作り方、インタラクションなど様々なことを考えることができました。特に生徒とのインタラクションについては、教師対生徒一人から教師対全体へのインタラクションの難しさ、そして重要性を感じることができました。教師対生徒そして、教師対全体のインタラクションをすることで英語での自然なやり取りを学習することができることだけでなく、生徒が英語の授業を能動的に受けることができることに改めて気づかされました。生徒全員を巻き込むインタラクションは難しいですが、出来るようになりたいと思いました。

また、**Small talk** や **Activity** での題材の選び方についてのディスカッションしたことで、どのように授業を作るべきなのか、深く考えることができました。真正性のある題材の選び方は難しいと感じていましたが、文教大学の方の教科書題材についての卒論を教えて頂き教科書を有効に使って題材を選択することが大変有意義であることを学びました。さらに、リスニングポイント、リーディングポイントについてもディスカッションをしたことで、生徒にポイントをつかんでもらう工夫など細かい部分まで勉強することができました。それと同時にリーディングの授業の作り方などをこれまで深く考えることができていなかったことに気づかされました。今回の学びを生かし、リーディング中心の授業において有意義な授業とは何か、工夫点、注意点などについて学んでいきたいと思いました。

今回の合同ゼミを通して、英語授業のより良い方法、授業を作る上での悩みなど文教大学の学生の方と意見を交わすことで、互いに学び合うことが出来たり、それらについて深く考えたりすることができました。合同ゼミの学びを生かし、これからも自身の英語力を向上させつつ、より良い授業を作るためにたくさんの方のことを勉強し、考えていきたいと思いました。

3年 佐藤 歩果